

フィリピンをめぐる明治期「南進論」
と「大東亜共栄圏」

早瀬晋三

はじめに

一般に、明治期「南進論」には、探険・冒険をとまなう異国事情の紹介を兼ねた、ロマンティズムを含む素朴な南洋への関心があったといわれる。政治的・軍事的性格の顕著な「北進論」とは異なり、明治期「南進論」は、通商拡大、移植民、資源開発・獲得といった民間人主導の経済的発展に基づく国利増進の主張が中心で、非政治的性格が強かった。

「南進論」というより「南洋論」「南方関与」ということばがふさわしい、具体性に乏しい内容であった。それが、大正期になって具体的な経済進出に必要な実利的情報を含むものが多くなり、さらに昭和10年(1935年)代になると、経済的情報に加えて政治的・軍事的性格をあわせもつ情報が多くなった⁽¹⁾。

しかし、フィリピン諸島に関しては、フィリピンの独立革命(1896~1902年)を絡めたきわめて政治的・軍事的色彩の濃い「南進論」が、早くも明治10年(1877年)代末から20年代に唱えられた。フィリピンをめぐる明治期「南進論」が例外的だったのは、つぎの5つの理由による。まず、日清戦争(1894~95年)の結果、日本は台湾を領有することとなり、スペイン領フィリピン諸島は日本とバシー海峡を挟んで一衣帯水の隣地になった。海外への膨張意識の高い当時の日本人にとって、フィリピンはつぎの侵略地に見えた。つぎに、このようなとき、フィリピンでは民族主義運動が高まり、独立革命へと進展していった。フィリピンの民族主義者は、日本に武器購入などで助力を求めようになった。フィリピン人の楽観的な期待に追随するように、日本人のなかにはフィリピンの民族主義運動に興味をもち、介入しようとする者が現われた。3つ目に、当時の日本は、孫文らアジア民族主義運動家の集まる場所であった。アジアの民族主義運動家の連帯のなかで、それを利用しようとする日本側の動きがあった。4つ目は、当時の日本は殖産興業政策の結果、海外への販路を求めている。朝鮮の例にならい、政治的・軍事的な力による経済進出地として、本国スペインの政治・経済力の脆弱さから、フィリピンもその対象になっていた。そして、5つ目に、二百数十年前の日本とフィリピンの関係があった。「南進論」者のなかには、歴史をひもとき、豊臣政権、徳川政権初期の呂宋征討計画の具体的事実をとりあげ、フィリピンは日本の領土となる運命にあるといった論調で、議論を展開する者が数多くいた。

このような具体性をともなったフィリピンをめぐる明治期「南進論」が、昭和16年（1941年）12月8日の開戦、翌年1月2日のマニラ占領、翌3日の軍政開始とともに、「大東亜共栄圏」の版図に組みこまれたフィリピンで、どのような意味をもったのだろうか。フィリピンをめぐる明治期「南進論」と「大東亜共栄圏」下のフィリピンとの関係を考察していく。

1. フィリピンをめぐる明治期「南進論」

（1）杉浦重剛「樊噲夢物語」

一口に「南進論」といっても、その論理は単純ではなく、複雑な要素の集合体であることはいままでもない。大きく分けると、政治的・軍事的側面、経済進出・資源開発的側面、移民・植民的側面の3つになるだろう。フィリピンをめぐる明治期「南進論」においても、これら3つのことが、複合的に絡みあった論理を展開していくことになる。

明治19年（1886年）10月、杉浦重剛（1855-1924）は、『樊噲夢物語』（沢屋刊）を出版した。杉浦は、明治20年代にナショナリストたちの言論活動の一大拠点となった、政教社の結成（明治21年）にかかわった中心人物のひとりであった。『樊噲夢物語』の表紙には「杉浦重剛立案 福本誠筆記 一名新平民回天談 全」とあり、第1頁表題下には「天台道士立案 青天布衣筆記」とあった²⁾。天台道士とは比叡山（天台宗延暦寺）を臨む膳所藩（大津市）出身の杉浦重剛の号で、青天布衣とは福本日南（1857-1921）として知られる福本誠の号のひとつであった。この『樊噲夢物語』は、昭和18年（1943年）3月東半球資料第35号として復刊された。その「小解」には、「杉浦重剛氏の立案せるものを、福本誠が筆記したる体裁になつてゐるが、大体に於て日南氏の構想執筆に成れるものであることは論を俟たない」と記している。事実上の著者は、福本日南だといふのである。フィリピン占領中に書かれたこの「小解」では、『樊噲夢物語』を「堂々たる一篇の菲律賓攻略論であることは疑ふ余地がない」とほめたたえている。しかし、福本は明治22年に出版した著書『フィリッピーヌ群嶋に於ける日本人』の最後で、「余は今日に当り、……侵略主義を取らんことを、現日本人に望む者に非ず」と述べており³⁾、もし『樊噲夢物語』の事実上の著者ならば、3年後に意見を变えたことになる。いっぽう、杉浦はほかの著作においても、差別を肯定・助長する表現を使い、その後問題視されることになる。『樊噲夢物語』での論調を一言でいえば、「吾党（新平民、被差別部落民）」9万人の壮丁をフィリピンに移住させ、「土人」と仲よくし、時を待って蜂起するというものである。杉

浦を差別論者として批判する者は、海外進出という体のいい国外追放によって、部落の抹殺、棄民を謀るものであると論断している⁽⁴⁾。杉浦の「南進論」は、現実性に乏しいといわれるが、のちに述べるフィリピン革命軍への武器輸出に関し、杉浦はかかわりをもっていた⁽⁵⁾。

(2) 菅沼貞風「新日本の凶南の夢」

現在、明治期「南進論」の代表的人物のひとりとして、菅沼貞風(1865-89)⁽⁶⁾をあげることには異論はないだろう。菅沼は、明治21年(1888年)の執筆とされる「新日本の凶南の夢」のなかで、「或る人の計画」として『樊噲夢物語』のつぎの一節を引用している。

……順次此島〔フィリピン〕ニ移住シ、奴僕農工百般ノ賤役ニ従事シテ以テ其機ヲ待つ可シ。……斯クノ如クセバ何ノ形跡ノ存ム可キアラム。法憲ノ間フ可キアラム。何ゾ況ヤ万国公法ニ触ルハノ恐レアラム。已ニ此島ニ移住シ土人ト相親ミ相交レバ、本是レ等ク東方ノ人ナリ。忽チ情誼ノ相忘ル可カラザル者アリテ、彼我ノ間ニ生ズルヤ必セリ矣。然ルニ欧西各国ニ於キテ自由ヲ貴ビ、權利ヲ重ズルニモ関ハラズ、東方諸属藩ノ民ヲ遇スル、苛税重斂以テ厭クコトヲ知ラズ、暴政虐令以テ意ト為サバル者ハ、吾人ノ熟知スル所ナリ。特ニ此島ヲ領セル本国政府ガ、此島民ヲ御スルガ如キ其最モ甚キモノナレバ、此ニ在ルコト一、二年ノ内ニハ必ズ残暴ノ以テ天下ニ表白スルモノアラム。此時コソ是レ吾党ガ為メニ千歳一時再ビ来ラザルノ機ナリ。此機ニ際シナバ吾党此島ノ四辺ニ散在スルモノ一時ニ蜂起シ、檄ヲ天下四方ニ伝フルコト米国ノ独立ノ日ノ如クシ、予約ニ順ヒテ将帥ノ命ヲ聽キ、一挙シテ彼ノ本国代理政府ヲ倒シ、悉ク暴政虐令ヲ廢シ苛税重斂ヲ除キナバ、四百有余万ノ民大旱ノ雲霓ヲ望ムガ如ク、其婦女ハ箒食壺漿シテ軍ヲ犒ヒ、其男子ハ雀躍抃舞シテ軍ニ從ヒ、数朝ヲ出デズシテ事大ニ定マラム⁽⁷⁾。

菅沼はスペイン人を「欧州中最も進歩せざる人種」とみなし、「我国今日の謀たる第一に戦端を開かざるべからざるものは朝鮮にあらず支那にあらずまた英魯独仏にあらず只西班牙に御座候」と述べ、さらに「呂宋に植民し土人と与に西班牙人を放逐し然る後我国の助けを得て其独立の基礎を定め扱呂宋王国の王位を以て我国の天皇には奉るべき義に有之候」と結論している。そのためには、まず砂糖、麻、タバコ栽培に従事する農業出稼ぎ移民9万人を送る必要を説いている⁽⁸⁾。菅沼は、杉浦重剛の『樊噲夢物語』を批判したとき

れるが、いっばうで大きな影響を受けたことも事実である。そして、明治22年、数え年25歳でマニラに渡っていったのも、杉浦の勸説があったからだといわれる⁽⁹⁾。

明治22年4月25日、マニラに渡った菅沼は、日本領事館の1室を与えられ、昼間は地勢民俗、風習、事業などの資料の収集、調査を行ない、夜は領事館の1室にこもってその整理に余念がなかった。その成果は、陸羯南とともに福本日南が創刊した新聞『日本』に「真韭通信」として送られた。そして、マニラに製麻会社を設立する準備をすすめ、そのための一時帰国を真近に控えた7月6日、菅沼はコレラのために急逝した。以前から脊髄膜疹症などの大病を患い、出発前からその健康が心配されていた。また、数日前から腸に変調をきたしていたところに、日ごろの無理がたたっての急患だった。その菅沼の最期を看取ったのが、福本日南であった⁽¹⁰⁾。

(3) 福本日南

福本日南と菅沼貞風は明治21年(1888年)夏に出会い、国威伸張のための外交・貿易の併進策で意気投合し、福本は菅沼の後を追って22年5月21日にマニラに到着した。それに先立つ4月20日、『フィリッピン群嶋に於ける日本人』が出版された。福本は、「菅沼貞風君卒す 真韭府の客館に於て日南居士誌す」で、「其資料は君が閩南の夢に得たるもの多し」と述べている⁽¹¹⁾。菅沼という朋友を失った福本は、その後明治25年に『海国政談』を出版し、海洋進出、海運振興の急を説いた。杉浦重剛にせよ、福本にせよ、西欧追従の欧化主義に反対する意味で唱えたナショナリズムとしての国民主義は、西欧勢力の及ばないあるいは弱い地域に、日本の勢力を伸張するという膨張主義をとまっていた。

このことは、日清戦争を契機に平民主義から国家主義に転じた徳富蘇峰においても、同じであった。明治29年に民友社(編纂)から出版された『比律賓群島』のまえがきで、蘇峰は「政府微弱なればとて、国民必らずしも微弱なるを要せず。……個人的活動ありて、国家的膨張あり。是れ自然の理也」と結んでいる。明治期の政治的論客は、きわめて国家中心的な膨張論者であったことがわかる。しかし、このことが具体的な政治的・軍事的「南進」へと結びつくかということ、話はまた別であるが、フィリピンではその絶好の機会が訪れようとしていた。

2. フィリピン革命と日本の政治小説

明治期、フィリピンに注目したのは、政論家・言論人だけではなく、文学界で「南

進」が注目されるようになったのは、明治20年（1887年）ころからであった。明治20年3月14日、明治天皇が「海防のことは1日も忽せにすべからず」との海防の勅語を発し、御内帑金30万円を下賜すると、軍事力と結びついた海国日本が話題になった。「北進」との対比から、海国日本は「南進」と結びつけて語られ、やがて海外貿易の発展とともに、南洋が日本人にとって、海国日本の進出地として身近な存在になっていった。このような時代背景のもとに、海洋文学は「南進」と結びつき、南洋の島に漂着したり、貿易で訪れたりした日本人が、「土人」を征服して王様になり、その領地を天皇に献上するという物語が愛読されるようになった。なかでも、海洋文学の代表的作品のひとつ、矢野文雄（龍溪 1850-1931）『浮城物語』（報知社、明治23年）は、オランダ、イギリスを相手に、植民地を奪取する内容になっていた。それ以降、海洋文学は日本人読者に欧米列強を相手にすることを覚悟させるものになった。そして、矢野の影響をもっとも顕著に受けた押川春浪（1876-1914）の小説では、欧米列強すべてを相手にすることも辞さない内容になった。

日露戦争（1904～05年）においても、実際の戦争より先に小説の世界で戦争がはじまり日本は大勝利していたが、日米戦争、「大東亜戦争」においても、小説の世界では開戦前に戦争がはじまり、日本が勝利していた。そして、明治20年代後半になると、それまでの漠然とした南洋の地理的概念から、海洋文学のなかでは、フィリピンが具体的地名として登場し、題材の中心となっていった。朱印船貿易の時代まで遡れる日本とフィリピンの歴史的関係は、文学作品に厚みを増していた⁽¹²⁾。

日清戦争の結果、日本が台湾を領有し、スペインとのあいだに境界条約が結ばれた明治28年（1895年）8月7日、フィリピンではいよいよ独立革命の気運が高まっていた。日本でもっとも早く、本格的にフィリピンの民族主義運動について伝えたのは、末廣鉄腸（1849-96）であろう。明治21年、祖国フィリピンを追われ、ヨーロッパへの亡命の途次に日本に1か月半滞在した、フィリピンの国民的英雄ホセ・リサル（Jose Rizal, 1861-96）は、ロンドンまで奇妙な日本人と同行することになった。鉄腸であった。旅行記『唾の旅行』（嵩山堂、明治22年）は、言葉がわからず失敗をくりかえすなかで、マニラ紳士ことリサルに助けられた話である。そして、リサルから聞いた話をもとに政治小説『南洋の大波瀾』（春陽堂、明治24年）を執筆し、フィリピンの現状を日本人に報せた。その内容は、日本人を先祖にもつ魔尼羅（マニラ）の多加山が独立をかけて西班牙と戦い、日本の援助をえて勝利し、緋笠濱（フィリピン）群島を天皇に献上するというものであった。

鉄腸も、先に述べた政教社や民友社の政論家・言論人同様、フィリピンを将来の植民地

とみていた。

1896年（明治29年）に、対スペイン独立戦争としてのフィリピン革命がはじまると、明治31年6月29日に武器払下げ交渉に來日したマリアノ・ボンセ（Mariano Ponce, 1863-1918）の本が『南洋之風雲 比律賓獨立問題之真相』（宮本平九郎・藤田季莊共訳、博文館 明治34年）として翻訳され、山田美妙（1868-1910）は明治32年の『暗黒世界 まにらの夢』（三国書房）を皮切りに、『政治小説 桃いろぎぬ』（嵩山堂、明治35年）、『あぎなるど』（内外出版協会、明治35年）、『小説・羽ぬけ鳥』『さびがたな』（ともに日出国（株）、明治36年）と、相ついでフィリピン革命を題材にした小説を発表した。また、押川春浪は冒険小説『武侠の日本』（博文館、明治35年）など一連の海洋小説を発表した。

春浪の作品は、とくに青少年に大きな影響を与え、「大抵の少年が親や兄貴を誤魔化して買った」というほど、好評を博した。これらの文学作品を通して、フィリピン革命は日本人にとって身近な存在になった⁽¹³⁾。

しかし、これらの作者は、単なる善意からフィリピン独立革命に共鳴しただけではなかった。これらの作品のなかには、朱印船貿易時代の日本人の海外雄飛・南洋進出と絡めてフィリピン人の血のなかにも日本人の血が流れていることを強調し、日本人を東洋の盟主と仰ぐ思想が脈略と感じられる。そこには、欧米の政治的支配・文化を東洋から排除・駆逐しようとする、「大東亜共栄圏」思想とあい通ずるところがあった。そして、これらの作者のなかには、山田美妙のように具体的にフィリピン革命に介入しようとする団体に属していた者もいた。美妙は、ボンセが訪ねた山県悌三郎の東洋青年会に属していた⁽¹⁴⁾。

3. フィリピン革命への介入

このころ、日本の軍部および政治指導者のなかには、マリアノ・ボンセなどの要求を聞き入れて、フィリピンに武器を援助するとともに、日本人軍人をフィリピン革命軍に参加させ、さらに革命軍が日本に従属するよう工作活動を行なう者がいた。フィリピンへの武器援助は、当時日本に亡命中の孫文、アジア主義者の宮崎滔天、犬養毅、平山周、代議士中村弥六らの協力のもと、紆余曲折の後、陸軍の使い古し村田銃などの武器弾薬の購入に成功し、明治32年（1899年）7月19日老朽船布引丸に積んで、嵐の前触れのなか長崎港を出帆した。しかし、台風に巻きこまれた布引丸は、7月21日上海沖で沈没した。武器輸出と絡めて、フィリピン革命軍に参加しようとした平山周はじめ数名の日本人志士は、言

葉が通じないなどのために、革命軍から参加を拒否されるなど、十分に役割をはたさないまま日本に引き揚げた⁽¹⁵⁾。

工作員は、台湾総督府から派遣された軍務局陸軍第一課長楠瀬幸彦中佐の数か月に及ぶ調査・情報収集の後、志願した台湾鉄道隊の坂本志魯雄が明治30年3月末マニラに到着した。坂本は各新聞社の特派記者および大阪の貿易会社の囑託の肩書きで、各地の在留邦人やフィリピン人を使って情報を集め、領事館の庇護のもとに革命の状況を悉さに報告した。

そして、日本軍の派遣によってマニラを占領する建策を、台湾総督府陸軍部参謀長立見尚文少将に提出した⁽¹⁶⁾。その後、大正中期に年度作戦計画に陸軍のフィリピン進攻が加えられて以来、フィリピンには陸軍の長期駐在将校が、多くは変名、変装して派遣された⁽¹⁷⁾。

フィリピンをめぐる明治期「南進論」は、明治20年代末には具体的に政治的・軍事的色彩を帯びながら唱えられていた。しかし、現実には武器はフィリピンに到着せず、日本人志士は本格的に革命軍に参加できず、軍事的工作は成功をみなかった。そのため、従来過小評価されてきたことは否めない。だが、昭和16年(1941年)末から17年初頭にかけての日本軍のフィリピン占領は、明治期「南進論」を呼び覚ました。

4. 明治期「南進論」の復活

明治期「南進論」の代表的著作として、菅沼貞風「新日本の凶南の夢」をあげたが、明治21年の執筆とされるこの著作が公刊されたのは、昭和15年(1940年)のことであった。つまり、明治期の代表的「南進論」とされながら、一般には知られていなかったのである。

菅沼自身がとくに有名になるのは、昭和10年代になってからであった。それを年譜で追えば、以下ようになる。

昭和10年 在マニラ日本人会により日本人墓地に盛大な遷墓式を行なう。

12年 佐世保商工会議所会頭北村徳太郎発起により菅沼貞風遺著刊行会組織。

15年 増補修正『大日本商業史』岩波書店から刊行に際し、「平戸貿易志」および「新日本の凶南の夢」を付録として併せて刊行。

16年 同上、再版発行。

東半球協会『菅沼貞風略伝』（東半球資料第12号、南洋資料第3号）

赤沼三郎『菅沼貞風』（小説）（博文館）刊行。

17年 2月5日 平戸にてマニラ陥落報告墓前祭営まれる。

花園兼定『南進論の先駆者菅沼貞風』（日本放送出版協会）刊行。

江口禮四郎『南進の先駆者 菅沼貞風伝』（八雲書林）刊行。

7月6日 菅原貞風顕彰会設立（会長大隈信常）

このように「南進論」の先駆者として、戦争勃発前後に菅沼は登場したのである。換言すれば、菅沼に変わる新たな「南進論」、すなわち、日本のフィリピン占領に際して、新たな指針を見いだせないまま、日本はフィリピンを占領したのである。菅沼が唱えた「南進論」の骨子は、杉浦重剛の論に同調した「新平民」の農業移民、そして「土人」とともに蜂起することだった。このことは、フィリピンの占領に際して、実現したのだろうか。

5. フィリピンの在留邦人の戦略的位置

フィリピンの在留邦人は、ダバオのアバカ（マニラ麻）栽培農民を中心に発展した。戦争勃発1年前の昭和15年（1940年）10月1日調査のフィリピン在留邦人人口は、2万8731人を数えたが、その約3分の2の1万9267人はダバオ領事館分館管内の日本人人口だった。

ダバオの人口は戦争突入後も減少することなく、昭和18年1月発表で1万9089人だった。

女性人口も7331人で38.4%を占めた⁽¹⁸⁾。菅沼貞風の説いた農業移民で、しかも菅沼自身が事業を展開しようとしていた製麻会社のためのアバカ栽培農民が、定着していたのである。これらの農業移民は、杉浦重剛や菅沼が期待したようなフィリピン人と協力して植民支配を脱する、戦略的な意味における勢力になっていたのだろうか。その前に、かれらは日本の軍部によって、戦略的にどう位置づけられたのだろうか。

戦争勃発から4か月後の昭和17年4月11日、陸軍省軍務局長加藤長中佐談の南方軍政建設の基本方針が発表された。そのなかには、新たに進出してくる邦人に対して、「進出邦人を厳選、国策に反するやうな行動をさせないこと」という項があった。しかし、在留邦人に関してとくに言及した箇所はなく、「経済開発の方針」の「企業形態」の項で、「現地で多年辛苦経営してゐた邦人企業者や、南方に関係のあつた業者に対して優先権が与えられることはいふまでもないが、これも調査の上、制限を加へ、真に国家的に必要と認める者のみに限られる方針である」とだけ記されていた⁽¹⁹⁾。この記述から、在留邦人がフィリピンの軍政に戦略的・組織的に組みこまれた様子はいかぬ。軍政監部が、くりかえし在留邦人に要求したことは、「比島民衆の亀鑑」という漠然としたものでしかなかった⁽²⁰⁾。

ではなぜ、フィリピン在留邦人、とくに2万人近くの日本人が居住していたダバオで、

戦略的に軍政に組みこまれなかったのだろうか。第1に、移民は「劣等国民」とみられ、内地から派遣された日本人と同等に扱われなかったことがあげられる。それは、杉浦が「被差別部落民」を海外植民に利用しようとしたように、一般に移民は「棄民」と結びつけて考えられていた。さらに、沖縄出身者の割合がしばしば誇張され、あたかも移民のほとんどが沖縄出身者であるかのように思われた。明治初期の「新平民」問題、沖縄の帰属問題・琉球処分（明治5～12年）が、移民・植民政策と絡んだ結果、移民に対する暗いイメージをともなう偏見が形成されていったのである。

つぎに、昭和11年8月の「国策の基準」で、「南進」ははじめて国策として認知されたとはいえ、とくに陸軍にとってはあくまで「北進」が基本であった。さきの加藤軍務局長談によると、「わが国防の基礎は常に日満支にある[。]南方開発に当つても常に日満支と睨み合せて、これとの調和を保ちつゝ経営することが絶対に必要である」として、「根幹は日満支」にあることを強調している⁽²¹⁾。ダバオが「日満支」はおろか、ほかの移住地と比べても、財政的に日本政府から冷遇されていたことは、昭和4年の隈川八郎（慶応義塾大学教授、医学博士）のつぎの報告からもわかる。

目下我が政府のダバオ在留民に対する補助金を一人当り二円とし、之れを他の地方に移住するものと比較するに、南米ブラジル渡航者の受くる補助金は、一人当り渡航費二百円及び諸種の保護費約五十円にして、尚同じく南洋にある隣島ボルネオ、タワオの邦人殖民地は在留民約三百四、五十名に対して年額約三万円、是亦一人当り一百円にして、これらに比してダバオ移民の受くる処はその数十分の一にも達せず⁽²²⁾。

戦争勃発後、ほかのフィリピン各地が陸軍第14軍の支配下に入ったのに対し、ダバオは海軍第32特別根拠地として艦隊の補給基地となった。軍納野菜生産などに徴用された日本人は少なくなかったが、そのほか在留邦人は献金、勤労奉仕など積極的に軍に協力した。しかし、「劣等国民」との印象を拭い去ることはできなかった。「在ダ同胞は過去において数々の不評をうけた」「ダバオの邦人について一時とやかくいはれたことがある」と新聞紙上に書かれたように、在留邦人はフィリピン占領後にやってきた本土の軍官民に「立派な日本人」ではないと、しばしば攻撃された⁽²³⁾。そのような在留邦人が、「立派な日本人」であることを示すためには、積極的に戦争に協力していく以外になかった。そこには、国に尽くしても尽くしても、認めてもらえない在留邦人の悲しさがあった。

昭和21年7月、元軍政監部総務部総務課長犬塚恵亮陸軍少佐が復員庁第一復員局に提出した「比島軍政の概要」のなかで、在留邦人はつぎのように評価された。

外務省大商社ノ関係者ヲ除キテハ戦前在比日本人ハ概ネ漁業、麻裁〔栽〕培、大工等ヲ主業トシ大部分沖繩県出身者ナリ一般ニ教養低ク礼節ニ乏シク特ニ下流比島婦人トノ結婚ニ依リ出生セシ日本籍第二世ニ於テ甚タシ

又戦前ヨリノ居住者及開戦後渡比者中不当ナル手段ニ依リ私利ヲ図ラントスル者無キニアラス

斯クノ如キハ軍政ノ浸透特ニ比島人心ノ把握ニ悪影響多キヲ以テ軍政支部管区毎ニ人格優秀ナルモノヲ会長トスル日本人会ヲ結成セシメ支部長指導ノ下ニ品性ノ陶冶向上相互ノ自肅練磨等ヲ計ラシム

而シテ日本人会ニ対シ軍トシテ自肅スベキヲ要望スルト共ニ其ノ意図外ニ出ツル者ニ対スル断乎タル処置ヲ採ル旨明言シ指導セリ（尚本時期日本人ノ体面ヲ流シタル者数名ニ対シ内地送還セリ）⁽²⁴⁾

この文章からわかることは、戦中においても戦前の在留邦人の評価がそのまま継続し、在留邦人の特性を生かした有効利用についてなんら述べられていないことである。むしろ、在留邦人が軍の邪魔になることさえ書かれている。このことから、外務省や大商社の関係者以外の、個人の意志でフィリピンに渡航してきた者は、フィリピンの日本軍政という組織に練りこまれなかったことが明白である。日本の占領地行政は、日本のための資源獲得作戦軍の「自活確保」など、占領地の利用を目的としたもので、占領地住民との宥和のなかで新たなフィリピン社会を築くことを念頭においたものではなかった。そのため、フィリピン社会での生活の経験を生かす在留邦人の活躍の場はなかった。活躍の場があったのは、資源開発、軍需物資の調達に必要なノウハウをもつ大商社の関係者だけだった。

日本軍は、合理主義・技術力に支えられた物質至上主義の白人優位の神話の支配から、ほかのアジアを解放し、精神力・自己犠牲の優位に基づく「大東亜共栄圏」を建設する、大義名分を掲げて戦争に突入した。フィリピンは、連合国側最強のアメリカ合衆国の植民地であったことから、日本の軍政はアメリカ色の払拭に力を注いだ。そのアメリカ色のなかには、有色人種を差別するアメリカ本国の姿があった。「アジア人のためのアジア」「フィリピン人のためのフィリピン」という日本側の標語も、白人支配下の有色人種の差別を念頭においてのことだった。

ところが、フィリピンでの日本の軍政がはじまると、フィリピン人は日本人が差別をする民族だと気づくようになった。日本人はアジアの指導民族としての教育を受け、とくに大正7年（1918年）以降に使われた国定教科書のなかで、「南洋の土人」概念が植えつけ

られていた。日本の海軍省は、「大東亜共栄圏」のそれぞれの国・地域を「①指導国（日本）、②独立国、③独立保護国、④直轄領および、⑤「圏外国の主権下の植民地）」に分けていたが⁽²⁵⁾、日本人は民族・出自・出身によっても分けていた。そして、日本人自身もさらに内地出身者、沖縄出身者、アイヌに区分していた。また、近代日本では、土農工商の身分制度にかわって、学歴偏重を中心とする序列社会ができあがっていた。

日本占領下のフィリピンでは、日本軍人、文官（司政官）、内地から派遣された大会社の社員、戦前から居住する在留邦人（内地出身者、沖縄出身者、フィリピン人と結婚した者、メスティーソ）、キリスト教徒フィリピン人（スペイン系メスティーソ、中国系、マレー系など）、華僑、イスラーム教徒、少数民族という序列社会が出現した。この序列はさらに細かく分類されていた。たとえば、同じ毎日新聞からマニラにやってきた記者でも、軍報道班員、毎日新聞マニラ支局員、マニラ新聞社（毎日新聞経営）社員という序列ができていた⁽²⁶⁾。

このような序列化のなかで、沖縄出身者やフィリピン人と結婚した者とその子どもたち（メスティーソ）は、日本軍に協力することによって、内地出身の在留邦人と対等に扱われることを信じ、また在留邦人も内地の日本人と同等に扱われるために、積極的に戦争協力していった。

いっぽう、親日派フィリピン人の有効利用もされなかった。戦前からの親日派サクダル党（Sakdal）・ガナップ党（Ganap）の流れをくむマカピリ（Makapili、愛国同志会）はフィリピンの国民党を主流とする戦前からの政治家・政治組織の抵抗もあって、重要な地位を与えられず、日本軍に利用されるだけ利用されたあと、日本軍とともに戦い、廃滅した。在留邦人の扱いと一脈通じるころがあった。フィリピン事情に詳しい在留邦人と日本に親近感をもつフィリピン人とを接近させることをせず、親日派フィリピン人をほかのフィリピン人から分離した結果、お互いがお互いを理解する機会は奪われ、お互いを尊重しあわない日本人とフィリピン人の関係を生んだといえよう。

日本軍に、明治期「南進論」にあった「日本人移民をフィリピンに送り、フィリピン人と宥和して、ともに戦う」発想はなかった。サイパン玉砕間近の昭和19年7月6日、マニラ近郊ボロの日本人墓地で中部ルソン日本人会、貞風顕彰会比島支部共催のもとに、菅沼貞風56回忌墓前祭が執り行われた⁽²⁷⁾。菅沼がフィリピンへの出発に際して詠んだ詩の最後の部分である「真韭の麻以て日本の旗を繋ぐに足る」ことの難しさを、ひしひしと感じる時期に行なわれた墓前祭に出席した在留邦人の重鎮は、このとき何を思っていたらう

か。

おわりに

「南進論」の政治的・軍事的側面は、日本軍のフィリピン占領で実現した。経済進出・資源開発の側面については、日本・フィリピン間の貿易高が順調にのび、1909年（明治42年）にフィリピンの全貿易額中国別10位であったものが、19年に3位、29年に2位になった。しかし、アメリカ領フィリピン諸島では、アメリカとの特殊な貿易関係があり、日本との貿易額は全体のわずか1割程度にすぎなかった。このことが、戦中経済を破綻に追いこむ結果となった。そして、移民・植民的側面は、フィリピン人に対して経済的に圧倒的に優位に立つ「ダバオ国」を形成したために、フィリピン人社会とは遊離した社会を形成していた。

フィリピンをめぐる明治期に唱えられた「南進論」は、あまりにも政治的・軍事的色彩が濃く、その後の経済活動、移植民活動の発展によっても、修正を加えることなく、戦争に突入した。そのため、占領地フィリピンの住民の「民心の把握」はおろか、在留邦人の「民心の把握」さえ成功しなかった。政治的・軍事的に優位な地位にあっても、占領地住民の宥和・協力なくして、占領地行政は円滑に行なわれるはずはなかった。それが実行できないかぎり、「大東亜共栄圏」は画餅にすぎなかった。明治期「南進論」で唱えられた画餅が、50年たっても画餅のままであったことが、「大東亜共栄圏」の虚構を如実に物語っているといえよう。

注

- (1) 矢野暢編『講座 東南アジア学十 東南アジアと日本』（弘文堂、1991年）、とくに総説、1章、2章参照。
- (2) 久木幸男「明治言論界と杉浦重剛」明治教育史研究会編『杉浦重剛全集 第1巻』（杉浦重剛全集刊行会、1983年）1004頁。
- (3) 福本日南『フィリッピーヌ群嶋に於ける日本人』（博聞社、1889年）113～14頁。
- (4) 久木幸男「杉浦重剛と被差別部落問題」明治教育史研究会編、前掲書、1024～26頁。
- (5) 石井英太郎『比律賓独立戦争秘聞』（比律賓協会、1942年）42頁。

- (6) 『国史大辞典』（吉川弘文館、佐藤能丸執筆）では、菅沼貞風の読みを「すがぬまただかぜ」とし、「さだかぜ」「ていふう」とも読む、としている。昭和13年（1938年）9月2日、マニラの新日本人墓地に移転された墓碑には、「SUGANUMA SADAKAZE」とある。
- (7) 明治教育史研究会編、前掲書、80～81頁。菅沼貞風『大日本商業史 付 平戸貿易志 変小為大転敗為勝新日本の凶南の夢』（岩波書店、1940年）682～83頁。
- (8) 菅沼、前掲書、680～82、698頁。
- (9) 江口禮四郎『南進の先駆者 菅沼貞風伝』（八雲書林、1942年）96～97頁。
- (10) 同上、103～12頁。
- (11) 同上、172頁。
- (12) 柳田泉『海洋文学と南進思想』（日本放送出版協会、1942年）。
- (13) 柳田泉、前掲書、61～62頁；柳田泉「政治小説の一般（二）」『明治文学全集6 明治政治小説集（二）』（筑摩書房、1967年）465～76頁。
- (14) 塩田良平「解題」山田美妙『フィリピン独立戦話 あぎなるど』（中公文庫、1990年）271、287頁。
- (15) 木村毅『布引丸』（春陽堂、1944年）；石井英太郎、前掲書；池端雪浦「フィリピン革命と日本の関与」池端雪浦・寺見元恵・早瀬晋三『世紀転換期における日本・フィリピン関係』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1989年）1～36頁；波多野勝「フィリピン独立運動と日本の対応」『アジア研究』（アジア政経学会）第34巻第4号（1988年3月）69～95頁。
- (16) 尾崎卓爾『弔民坂本志魯雄』（弔民会、1932年）。
- (17) 秦郁彦『日本陸海軍総合事典』（東京大学出版会、1991年）653～54頁。
- (18) 早瀬晋三『フィリピン行き渡航者調査（1901～39）——外務省外交史料館文書「海外渡航者名簿」より——』（京都大学東南アジア研究センター、「総合的地域研究」成果報告書シリーズ8、1995年）51頁。
- (19) 加藤長談『南方軍政建設の方針』（南洋経済研究所、1942年）5～8頁。
- (20) 早瀬晋三「「ダバオ国」の在留邦人」池端雪浦編『日本占領下のフィリピン——「大東亜共栄圏」の虚構と傷跡——』（岩波書店、印刷中）。
- (21) 加藤長談、前掲書、9頁。
- (22) 隈川八郎『比律賓ダバオ州に於ける邦人産業調査報告 付 同地在住邦人の保健に

- 関する意見書』（台湾総督官房調査課、1929年）16～17頁。
- (23) 『ダバオ新聞』1943年5月21日；『マニラ新聞』1944年3月7日。
- (24) 犬塚恵亮「比島軍政の概要」「南方作戦ニ伴フ占領地行政ノ概要」（復員庁第一復員局、1946年）別冊其の一（防衛庁防衛研究所所蔵）、17～18頁。
- (25) 川村湊「大衆オリエンタリズムとアジア認識」大江志乃夫他編『岩波講座 近代日本と植民地7 文化のなかの植民地』（岩波書店、1993年）107～36頁；後藤乾一「近代日本・東南アジア関係史論序説」土屋健治編『講座現代アジア1 ナショナリズムと国民国家』（東京大学出版会、1994年）38～39頁。
- (26) 南條岳彦『1945年マニラ新聞 ある毎日新聞記者の終章』（草思社、1995年）182頁。
- (27) 『マニラ新聞』1944年7月7日。